

『学級王国の状態を否定する』

「学級王国」という言葉がある。学級王国とは、その学級の独立性を強め、教師が互いに他の学級に干渉し合うことがなく、学習や生活の指導をはじめとするあらゆる教育活動がそれぞれの学級担任の独自性に委ねられている状態をさす。したがって、学級のあり様は、担任の人間性、指導力、識見などによって大きく左右される。

学級王国の状態にある学校は必ずしも大規模校とは限らない。小規模校においてもありうる。学年が1学級編成である場合には、学級担任の独壇場となり易く学級王国となる傾向が強くなる。また、この傾向はかつて小学校に多く見られ、一日の学校生活において、ほぼ全ての教科を受け持つ担任が、学級の子どもと過ごす時間が長いからである。中学校では、学級王国の状態が全くないとはいえないが、教科担任制により、学級担任が学級の生徒とかかわる時間が限られているため学級王国の状態が小学校ほど顕著ではない。

私が小・中学生だった頃、いまから45年以上も前のことだが、私が通っていた小学校は同じ学年が5学級、中学校は10学級、いずれも児童数、生徒数が1200人を超える規模の学校だった。

それぞれの学級を受け持つ教師たちは、人から指をさされないようにとこぞって学級づくりに励み、互いに競争したのである。競争相手は常に他の学級であり、学習指導はもとより、我が学級の子どもが運動においても、行動面においても他の学級の子どもよりひき出していないといけないのである。

学級対抗のドッチボールやバスケットボール大会や校内の合唱コンクールなどがあれば学級王国を築き上げている担任は、強烈な指導性を発揮し、子どもの都合や迷惑を考えずに、それはそれは物凄い練習を強いてくるのである。もしも、校内の大会やコンクールで優勝しようものなら、誰よりも感激し、その喜びを必要以上に表に出すのである。それは正に学級の子どもたちの頑張りを喜ぶというよりは、担任教師が他の学級を打ち破った優越感に浸っているといった様子であった。

学級の子どもたちが、一致団結して一つの目標に向かうことは、とてもよいことであり、よい意味での競争があっても然るべきなのだが、常に他と比較し、優位に立ったとか劣勢に陥ったなどが主となることはいかかなものか。「勝った、負けた」につき合わされる学級の子どもたちはたまったものではない。

担任教師の強烈な個性と指導力の下、私たちは従順に担任の指導を受け入れ、学校とは

そんなところと思っていたのかもしれない。また、保護者もある程度学校は子どもを厳しくしつけるところと考えていた向きもあったり、保護者自身もそのような時代を過ごしてきたのであろうから、学校にたいして意見を申すなどということは少なかったのだろう。

私の母親なんかは、私が中学生時代、定期テストの度に100番以内が廊下に張り出される主要5教科の合計点による順位のことしか頭になく、「10番以内に入ったら、欲しい物何でも買ってやる」といった始末。しかし、私が10番以内に入ることはなかった。

それこそ当時の担任は、自分の学級から何人100番以内に入っているかということに極めて神経をとがらせていたようで、学校にいても、家にいても、担任と母親から同じ口調で常々せめたてられたのである。目的は番数だったのか。

過去に遡ると、学級王国ありきの状態が学校の中で当たり前とした時代の背景があったのかもしれないが、学級王国であることについては徐々に否定的な受け止め方がされてきた。一教師の独自性がよい効果を生み出すこともあるだろうが、子どもの側からすると、学級担任が変わる度に担任の思いや指導方法に馴染むまでに時間と労力が費やされる。保護者にしても、子どもが右往左往する様子を見ることになるだろうし、担任の当たりはずれといったことが心配の種となるであろう。学校の中においては、「担任のいうことはよくきくが、他の教師のいうことはさっぱりきかずにあの学級の子どもたちは生意気だ」との声があがることも……。

学校は、校長の経営方針に基づいて、掲げた目標に向かって組織として子どもの教育にあたるべきところである。一教師の独自性に任せっ放しで、「これが本校の教育です」とはいえないはずである。

学校の教職員についても、それぞれの教員の得手不得手があるだろうし、年齢や経験もまちまちである。どの教員がどの学年、学級を担当するにしても、学校の子どもたちが不利益を被るようなことがあってはいけない。そのためには、学級担任に全てを委ねるということではなく、学校としてその子どもたちの教育に責任を持つという姿勢が大切である。

今、子どもたちが学年が進む上でのつながり、幼稚園、保育所から小学校へ、小学校から中学校へのつながり、つまり、子どもたちが、担任が変わっても、次の学校へ進んでも子どもが戸惑うことなくスムーズに学校生活に入っていくことができるための研究や様々な取組が行われている。特に、学級担任が変わっても、学習指導のあり方、生活指導のあり方が教師ごとに違うということがないようにという取組が各学校で進められている。

学校は教師の自己顕示を満たす場所ではなく、真に子どもたちの将来を見据え、その子その子に見合った教育を尽くすところ、常に主役は子どもであるということを根に据えた学校であってくれることを切に願っている。